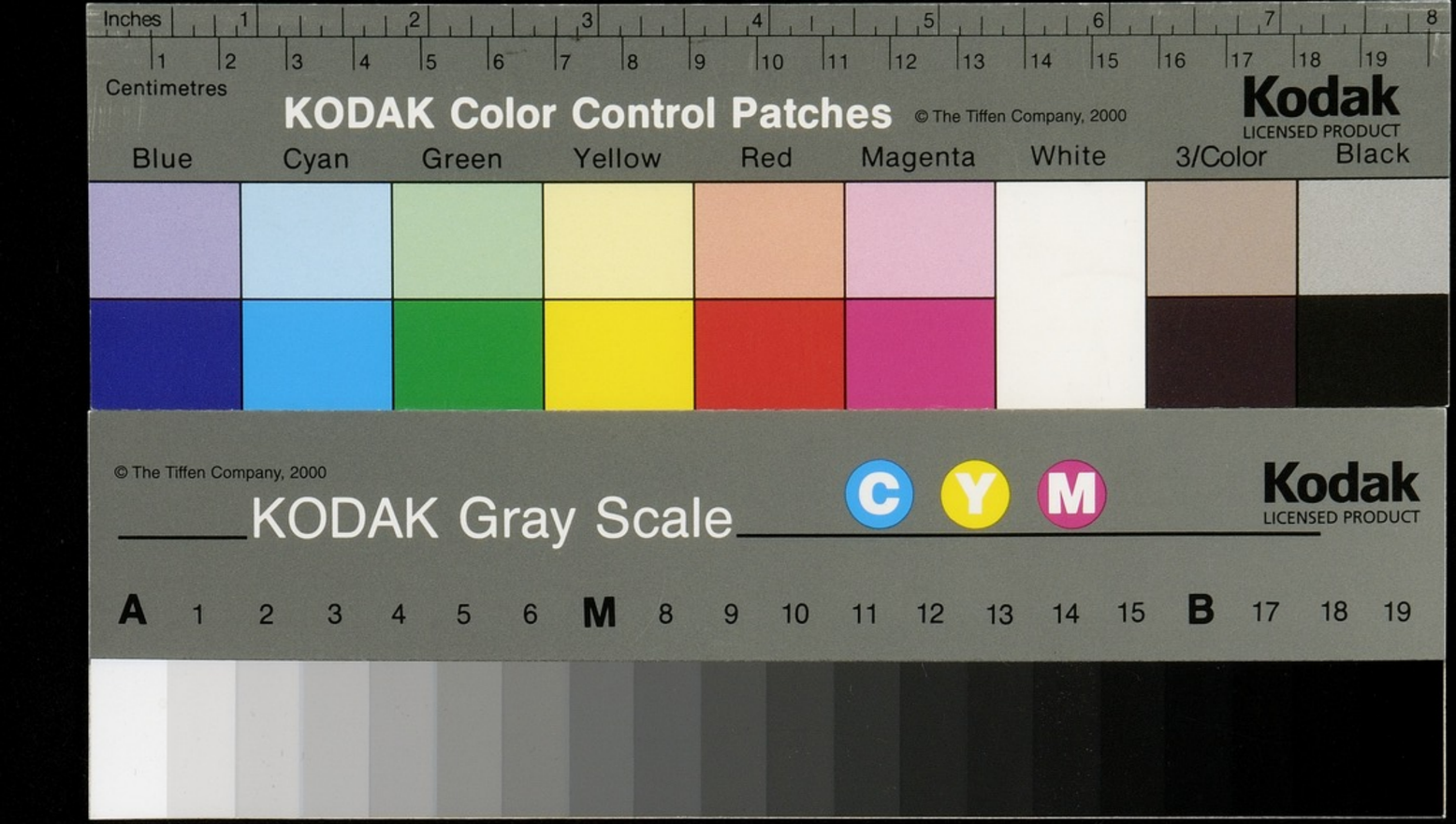

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
© The Tiffen Company, 2000
KODAK Gray Scale
C
Y
M
Kodak
LICENSED PRODUCT
A
M
B


0
50
100
150
200


後編

椿說弓張月　後編巻之一

# 爲朝外傳椿說弓張月

## 備考

爲朝琉球へ渡リ王ヒシトイフコト。神社考。及和漢三才圖會ニ記載ストイヘ𪜈プルクハ我邦ノ史籍軍記ニ見エザルヨシハ既ニ前篇ニイヘリ。然𪜈ソノ論未盡ヲモツテ。再コヽニ辨ズ。余嘗テ史類篇。中山傳信錄等ヲ閱スルニ。琉球中興ノ主。舜天王ハ。スナハチ爲朝公ノ子ナルヨシ。其書ノ注ニ見エタリ。傳信錄是等ノ奇事。我邦ノ舊記ニ見エズシテ。卻異國ノ書ニ記セシコト。可怪トイヘ𪜈。カヽル例間コレアリ。常山樓筆餘云王充カ論衡ニ周時天下太平。越裳獻白雉倭人貢鬯艸トイフ事見エタリ。越裳ノ中國ニ至リシヘ。周成王ノ在位周公執政ノ時ニシテ。日本太古ノ時ニ當レリ。鬯艸ハ

ユトモ。我邦ノ書ニハ記載セズ。

馬琴按ズルニ。崇神一鹹草ニ作ル。和名ヲアシタ草トイヘリ。此草八丈嶋ノミニ生ズ。本草ニ鹹草在扶桑東女國而氣香味鹹彼人食之ト記セル是也。異邦ニ女國ト稱タルハ。我邦ノ八丈嶋ナルコト知ベシ。鹹草ノコト。文獻通考ニモ見エタリ。

又梁ノ任昉ガ述異記ニ。日本國有金桃其實重一斤ト記シ。又謝在杭ガ五雜俎ニ。日本ニ龍蓋アリ。價甚貴ト。イヘリ。又明ノ徐燉カ筆精ニ。嘉靖年間胡總制宗憲。有軟弱刀長七尺出鞘地上卷之詰曲如盤蛇舒之則勁自若。唐天寶時有軟玉鞭光可鑑屈之則如環伸之如繩亦異國所獻鐵玉最堅剛能屈伸之理不可曉者ナリトイヘリ。軟刀トイフモノ。實ニアリケルニヤ。井蠶ノ管見モテ。奈何ト。モ思ヒ定メガタシ。悉ク書ヲ信ズルノ蔽。子輿氏ガ最誡ル所トイヘド。徐燉モ胡宗憲ト一同時ノ人ナレハ。傳聞ノ誤トモ言ベカラザルモノカ。猶コノ外ニモ。五雜俎ニ説トコロ。嘉定乙亥年。僧德明遊山シテ。奇菌ヲ得タリ。歸テ衆ニ供ス。毒發シテ。僧行死スル者十餘人。德明亟ニ糞ヲ嘗テ免ルヽコトヲ獲タリ。日本ノ僧定心トイフモノアリ。寧死トモ汚サス。膚理折裂ニ至テ死ス。今ニ至テ菴中藏トコロノ。日本ノ度牒アリ。其僧姓ハ平氏。日本國京東。相州行香縣。上守鄉。元勝寺ノ僧ナリ。寧非命ニ死シテ。其口ヲ汚サズ。陳仲子ガ風ニ庶幾ト誉タル類。異國ノ書ヲ見テ。稍我邦ノ人傑珍器ヲ知ノミ。然ル片ハ爲朝ノ琉球ヘ渡リ王ヒシトイフ説モ。誣ベカラズ。源義經ノ高館ヲ逃シ朝

夷義秀カ。朝鮮ヘ渡シトイフ。無稽ノ説ト。日ヲ同シテ論ズベカラズ。

言ノ序ニ云フ。近曾好事ノ者。南洲草堂集ニ因テ。金ハ義經ノ子孫ナリトイフ。按ズルニ南洲草堂集巻二十。中洲詩選序云。金源氏之継遼也。雄居大河南北。其時宋之遺民野老。未盡徒而南渡。流風餘韻。猶有存者云云。又金詩選ノ序ニモ。金源氏ト記セリ。異邦ニ源氏アルコト珎ラシケレハ。金ハ義經ノ子孫ナリトイフナルベシ。然ル時代ニ合サル所アリ。顧フニ陸奥話記ニ。金氏ノ人見ユ。金爲時（氣仙郡司）金爲行（ガ一族）金師道。金依方。金則行。金經行等是也。モシ附會セバ。金ハ日本金氏ノ後ナリト。モイフヘシ。

或云。肥後国熊本ノ城下ヨリ南ニ當テ。木原山アリ。コノ山ヨリ二十餘里南。水俣ノ海邊濱村（芦北郡ト）ト。イフ處ニ矢八宮ト稱ル小社アリ。爲朝琉球ヘ渡リ王ヒシトキ。コノ地ノ漁夫等別ヲ惜テ。直垂ノ袖ニ携テ引留シヲ。振切テ行玉ヘバ。片袖断離テ。漁夫ノ手ニ遺リタルヲ神体トス。直垂ハ萠黄色ノ絹織紋ナシ。祭禮ハ八月十五日ナリトゾ。供物ニハ赤小豆飯鮮鱠醴ヲ獻ル。祭礼ノ日コノ三種ノ供物ヲ備置次ノ年ノ祭ノ日。ハシメテ神扉ヲ開見ルニ。飯モ鱠モヨク乾キ。醴モ味カハルコトナシ。此供物ハ鼠ナドモ懼レテ食ハズ。儻竊食フ鼠アレバ忽地死ス。蓋神ノ罰シ玉フニコソ。係ル荒神ニ在セバ。祭礼ノ時ナラデハ。神扉ヲ開コトナシ。土俗疱瘡平安ノ願ガケスルニ應驗アリトイフ。コレハ爲朝八丈嶋ヘ渡リ玉ヒシトイフニ就テ彼嶋人ハ疱瘡セ

ズトイヘバ。カヽル願事ヲ申スニヤアラム。八丈ノアシタ草ヲ。疱瘡除ト稱ルモ。其意同カルベシ。又葦北ノ内。津奈木トイフ海邊ニ漁村アリ。コヽモ爲朝ノ宮ト稱ル小社アリ。爲朝ノ穿玉ヒシ。奴袴ヲ神体トス。熊本ヘ二十餘里。津奈木ヨリ水俣ヘ五里餘。水俣ヨリ薩摩ノ堺マデ。六七里アリトゾ。又一說ニ。八丈ノ枝鳴ニ。小鳴トイフアリ。本鳴ヨリ酉ノ方。海上二重許ヲ隔テリ。コノ鳴ニ八郎明神ノ社アリ。鎭坐ノ年月詳ナラズトイヘド。口碑ニ傳ル所ハ。爲朝伊豆國大鳴ヘ配サレ。其後鳴ヘワタリ玉ヒシ時。八丈ヘモ來玉ヒテ。深ク鳴人ヲ憐ミ。終ニ小鳴ニ於テ。美安三年八月十五日ニ自滅シ玉ヒケルヲ。今按スルニ保元物語ニ嘉應二年四月下旬爲朝伊豆ノ大鳴ニ於テ自害スト見エタリ。三義安三年八月十五トイフ不審 鳴人其德ヲ慕ヒヤガテ鳴ノ鎭守ト崇祀奉リケルニ。神德空カラズシテ。頼朝卿在世ノ比。後高倉院ノ宮ノ御筆ニテ。八郎明神トアソバシタケル神号ヲ。金銅一尺ノ影付。神影ヲ鑄テ。コレニ甲冑ヲ相添納奉ラセ玉ヒシヨリ。鎌倉ヨリ。將軍潟仰相續セリカクテ遥ニ年ヲ経テ。慶長七年。再ビ爲朝ノ神影ヲ造奉ラル。其後正德元年。神主菊池虎之介神体ヲ守リテ東都ニ參府ストイヘリ。馬琴ガ家藏ニ。八郎明神ノ神影一幅アリ。八丈嶋正一位八郎大明神。慶長七壬寅八月十五日。神主菊池壹岐守ト記シテ。關防ニ無上靈寶ト。神道加持ノ印アリ。コハ爲朝ノ神体。東都ニ來ラセ玉ヒシ時。神影ノ版シテ。信心ノ士庶ニ與タルモノナルベシ。今コノ二說ヲ合セ考ルニ。爲朝八丈ヨリ九州ヘ赴キ。ソレヨリ琉球ヘ渡リ玉ヒケンヲ。嶋人ハ小嶋ニテ自滅シ玉ヘリト。誤傳ケルニヤ。爲朝ハ子孫モ夥オハシケルト見エテ。

難太平記ニ。八幡殿ノ御子。義國ヨリ。義康義包ト相續ス。抑義包ハ。長八尺ニ餘テ。力人ニ勝レ玉ヒシナリ。實ハ爲朝ノ子ナリシヲ。義康ノ猥ノ中ヨリ養キ。世ニ憚テカクシ玉ヒケレハ終ニ知ル人ナシト見エタリ。コノ義包ハ。思慮深キ人ニテ。頼朝卿ボノカニ義包ノ武勇勝レタルヲ傳聞テ。對面スベシトイハセラレケル二。義包熟思フヤウ。既ニ足利ノ家ヲ繼トイヘ。實ハ爲朝ノ子ナリ。今右大將家ニ對シテ。サセル宿意アルニアラ子ド。彼人ハ一家ニ名アル者ヲ悉ク亡ヘリ。只詐リテ狂人トナリ。頼朝ノ心ヲ安センモノヲトテ。狂氣ノ由ヲ披露シテ。一度モ對面ヲ遂ラレズ。一生安座シテ。天然ヲ終玉ヒシト。或書ニ見エタリ。サルカラニ。足利將軍ハ。コノ義包ノ子孫ニテオハセバ。爲朝ノ後裔室町家ノ時ニ繁昌セリ。又天野氏ガ塩尻ニ云。或問。尾城ノ南太渡村。太渡一本ニ。爲朝塚ト呼ブ處アリソノ地闇森等ニ。村ヲ知行セシニヤト覺侍ル。爲朝義實爲朝ノ子

實信同上 上西門院判官代

爲頼同上号鳴冠者 爲家同上後爲政ト改ム 女子以上六人 又義實ノ子二人。

於大嶋出生 大嶋ノ祖ナリ

義直上西門院ノ判官代 義信尤衛門尉 義直ノ子 義益太郎 又實信ノ子二人。義房藏人三郎 僧慶秉一作慶桑二 義房ノ子二人。義季市部太郎 住尾張市部庄 義長三郎 又爲家ノ子三人。爲宗鳴ノ太郎 爲通大嶋七郎 如此見エタリ。後裔當國ニアルニヤ。分明ナラズ。俗ニ太通大嶋二郎 朝宗大嶋七郎 朝宗ノ子爲渡闇森ハ。爲朝ノ靈ヲ崇祝ト云フ。今ハ八幡ト稱セリ。

今按ズルニ。大系圖卷ノ二十四。爲朝ノ譜ニ。朝宗ヲ爲朝ノ子ト

シテ。女子ナシ。保元物語爲朝自殺ノ條ニモ。女子ヲバ母カ抱去トアレハ。大系圖ニ漏タルナルベシ。又義季。義長爲宗。爲直。コノ四人ヲノ載セズ。源平系圖ヲ考ルニ。爲朝ノ子。太郎丸二郎丸ト有テ。其餘ヲ載セズ。繪入武家系圖以下ノ書ハ。麁漏ニシテ考ルニ足ラズ。天野氏ハ。何ニ因テカク出サレケルニヤ。ナホ尋ベシ。

又一書ニ攝州伊丹ノ南ニ。爲朝八幡アリ。鎭西八郎ヲ勸請ストイフ。傳記詳ナラズ。コレモ闇森ノ八幡トオナジカルベシ。又一說ニ。八丈嶋ニ。香爐山彌陀寺トイフアリ。後宗福寺ト改ム。住持六世ノ上ニ爲朝ノ亂ヲ遣シタルニヤ。其末葉タルニヨツテ。嶋人尊稱シテ宮ト稱シ。神佛ニ限ラズ。諸事ヲ主リテ。嶋ノ長タリ。此嶋ニモ。爲朝ノ廟アリ。

夫ト稱テ。神主ヤウノモノアリケリ。宮ト太夫ト主從ニテ。嶋ヲ一圓ニ押領シテアリケルヲ。康正二丙子年。武州神奈川ノ領主奧山宗村ソノ家臣作右衞太郎トイフモノヲ嶋ヘ遣シ同年十月十四日雲加入道カ一子若宮トイヒシモノ。幷ニ太夫ヲ討トリシカバ。雲加入道力不及シテ。作右衞太郎ニ降參シ。討レタル一子ノ爲ニ。神奈川ノ宗福寺ヲ請待シテ。住持トシタルニヨツテ。寺号ナ宗福寺ト更タリトイヘリ。余カ管見ヲモツテスルニ。爲朝ノ事蹟カクノ如シ。又異國ノ書ニ見エタルハ。

元史類篇云按琉求上世無攷據其世譜圖云宋淳熙十四年。今按是皇朝後鳥羽院文治三年ナリ。舜天即王位舜天爲朝公之男子。未詳何許人其不祧祖也。祧祖ハ先祖ノ廟ナリ。在位五十年。傳信錄作在位十一年長子舜馬順熙嗣。在位十一年淳祐九年。

長子義本嗣在位十一年。時民苦疾疫多依英祖英祖者天孫氏天孫氏ハ琉球開闢ノ祖ナリ之後也義本遂遜位焉在位四十年。薨地始廣大火德四年英祖子大城傳信錄作大成嗣在位九年。云云續弘簡錄コレニ同シ又中山傳信錄云舜天日本人皇後裔大里琉球ノ按司名朝公男子也淳熙七年庚子年十五屢有奇徵長爲浦添按司人奉其政斷獄不違天孫氏二十五世。政衰逆臣利勇特寵執權。鴆其君而自立舜天討之利勇死諸按司推卽位賞功罰罪民安國豐在位五十一年。壽七十二嘉熙元年丁酉薨。下畧カレバ爲朝ノ子舜天ハ琉球中興ノ賢王ナリ且元史類篇二琉求世賛圖ヲ援テ爲朝公之男子云ト錄シ中山傳信錄ニハ日本人皇後裔大里ノ按司朝公ノ男子云云ト記セバ爲朝琉球ヘ渡王ヒテ按司ノ職ヲ授ラレ其子舜天天孫氏二代ヲ彼國ニ王タリシコト誣ベカラズ。

時代モ又相應ス。和漢三才圖會二琉球ニ爲朝ヲ祀テ舜天太神宮ト崇ト記セシハ誤ナリ舜天ハ爲朝ノ子ナルコト見ツベシ傳信錄ニ載スルトコロノ中山世系ヲ按ズルニ開國ノ主天孫氏二十五世ニシテ滅亡。爲朝ノ子舜天位ニ卽是中興ノ賢王ナリ因テモノニナ舜天ヨリハジム。舜天ヨリ義本ニ至テ三世國ヲ治ルコト七十三年ニシテ。英祖ニ讓ル。英祖ヨリ西威ニ至テ五世。共ニ九十九年ヲ經テ。察度カハウテ立其子武寧ニ至テ五十六年。コノ時琉球三國ニ別レテ。合戰止コトナシ時ニ尚巴志トイフモノ。山南山北ヲ滅シ遂ニ幷テ中山王ヲ滅シ。三國ヲ合シテ一トシ。其父思紹ヲ奉シテ王トス。思紹尚巴志ヨリ。尚德ニ至テ七世。共ニ六十四年。時ニ世子幼稚ナリ國人コレヲ廢シ。內間ノ里主御鎖側ヲ奉ズコレヲ中山王尚圓トス。尚圓ハ北夷伊平

ノ人即葉壁山是ナリ。永樂十二年乙未日本應永二十二年二生ル。字ハ思徳金。其先祖知ベカラズ。或曰義本爲朝ノ曾孫也。位ヲ讓テ北山ニ隠ル。疑ラクハ其後ナラントイヘリ。尚圓ヨリ今ニ至ルニテ。相續テ彼國ヲ御ス。設累シテ尚圓ハ。義本ノ後ナラバ。爲朝ノ子孫再琉球ニ王タリ。是亦奇トイヒツベシ。

抑爲朝ハ。武勇弓勢ノ世ニ勝レタルノミニアラズ。孝悌忠信ノ志厚クシテ。深ク義ヲ重ジ博ク仁ヲ施シ。至ル處俗ヲ化シ風ヲ移シ。至徳太伯ニモ恥ベカラズ。此弓張月ハ。唐山ノ演義ニ擬シテ。專作設ケタル物語ナレド。今アケツラフコトノミハ。例ノ寓言ニアラズ。只世ノ童子等ニ。爲朝ノ武徳ヲ知セマホシク。漫ニ筆ヲ走ラス而已。

丁卯季春

曲亭主人誌



男嶋鬼夜叉



性廉直おもく忠義あつ
嘉應二年夏四月扈朝狩野次が
兵仗辟ざる九州へ赴くの日
主よ代ざる死を



球陽福禄壽



樽窻茶話曰琉球僧云
我國每代必生一異人
身首相半稱曰福禄壽以
爲國瑞
産於
民間
取而養于
宮中雖在紛擾之
中少不動心醫卜百
家書無不通今所稱福禄壽者各
曰壽水正百餘歳媿有童顔

三郎長女



稟性勇敢く怜悧
衆に勝れり年十七
かく従容女の
身ゝ山猫狐教え
後爲朝ゝ
給事しく
男子成
産めり

山猫



海東の嶋中ゝ
山猫あり毛色灰の
如くかく足短く形
長ふかて四尺ゝ
及ぶといえり常ゝ
深山幽谷の中ゝ
かくれく人の眼よ
かくらせ飢ゝえ
人家ゝ入りて食を竊
動もすれば小児を銜去りて
食うのとなん

## 高間太郎



勇猛ふかぶかと杜鵑よりあとを慕ひ二代の忠臣萬夫の暁勇跡を殿迴ふ埋め人を鶺渡ふ惹ア

## 磯萩



衆人逃去れども高山寒ふ留りよく〳〵白縫ふ給事ーて赤心比ふ。孤雁對ひ得てよろ〳〵終ふ魚腹ふ葬られ南ふ歸とりども先途風濤ふ

鎮西八郎爲朝外傳椿說弓張月後編目錄

第十六回
瞻二飛鳥一爲朝渡二女國一
第十七回
勇婦振レ刀山猫忽死
第十八回
海東磯一箭伏二洲民一
第十九回
爲朝武威退二痘鬼一
第二十回
忠重潛走二伊豆國府一
第二十一回
爲頼前栽弄二紙鳶一
第二十二回
棄レ船孝子述レ志
第二十三回
海岸慕二孤客一水晶花 ・ウノハナ
第二十四回
渦丸夜鬧逢二日浦一
第二十五回
壯士知レ人與二割符一
第二十六回
八郎苦計遣二朝稚一
燒レ舘忠臣代レ主
池水現二三尊一並頭蓮
嶋君潛赴二尾張路一
八郎決レ死詣二靈墳一
因二夏夢一長女譯二和語一
猛將定レ計夫婦全娶
大兒嶋三郎認二英雄一
忠重被レ罪失二十指一
義康遺書大嶋謫居

窮士雪中殺二野豬一

第二十七回

木原山亡妻遇二亡夫一

第二十八回

白鶴呈レ瑞舜天降誕

第二十九回

雁回山孝童索二父母一

通計三十回其十五回以上既出于前篇

第三十回

水俣濱漁夫祀二為朝一

後篇六冊目錄終



鎭西八郎爲朝外傳　椿說弓張月後篇卷之一

東都　曲亭主人編次

第十六回

飛鳥を瞻て爲朝女國へ渡れる靈夢ふしぎに因て長女和詩を譯す

鎭西八郎爲朝そ。保元の擾乱ふ。て後るゝとても勇となりて。伊豆の大嶋へ流され一命ふ。恙なりとも。御父爲義死に。めりて。氏族親族殿新院の御爲ふ。元を喪ひ。偕老の契淺かりし。白縫姫さへ世ふりて人とおぼけれよ。新院も去年の秋長寛二年八月九六日讃州直嶋の御所ふして。山崩御はしはせしこへゝえかば。世ハそやかうとも洩ほゝらて。僕これがとの嶋の嶋守とそうおもうり。既ふ十年の春を迎。僕ふくも人もなるべふ。簾江が信ふうれふ。二人まで子を産しかへ。勲ふ絆とおりて。それかゝりてもめぐめれ。子共おがゆくをふいうあ

めいんと折ふしはそひゐりる人けめ恩愛のやれこうさ猛士武士もかくぞめれ
ど矣二郎太夫忠重も爲朝の武威を仗ひ。その後を友心伏敬ひ。はゐ永萬
元年三月のこと爲朝こゝかゝ伊豆の嶋〻を歷覽わたしゝて後者いと
寡し。一艘の快舩ふうち乘こゝ利嶌。らうとほし。ぜ。もんそぜいうんそめど。人なれ
んそ。神倉。神津の嶋〻へ推渡りのふふう。
嶋ハカ及ばど。人のかゝよ狂へ。荒磯めとゝ濱もいこゝぐ。漁獵のそのふ同じ。
仁義礼智孝悌忠信のハッを失ひ」と。ぜ。ゐ辨へられ勇士の本意ふ宗とー
のひとつのべ。彼此の嶋〻ふゝ。叮嚀に歎待せゝぜ。是首よりハ彼首。こゝ
ようハ其方と。審ゐ指南いとしけり。ぜ。て神津より海上十里ぐろを隔て。ぜ
付嶋今の三宅廣らうれが且く其処よ退留し。ぜ
めれ日磯ふおぢこ。嶋の長を招こゝ。この外みもの日渡こゝた嶋めやと合ふ
ふ。嶋長荅へこ。是ようこれハ潮も引出さだこ。ぜふよろそ嶋のめゝおゝいゝりたれのものハかれねごよやめりこも。人れ
ゐる処なゝ。彼むものもなゝ嶋ふこそ。ぜふばからしゝて渡りふもものかひ
るゝめと回荅も果ぬふ。忽地えうれざれ鳥どもうち群こ。漁のからこそ飛行ける。
爲朝佶とえそうにこ汝ホめの鳥ハえよ。時ゝゝめゆくみめゝぞやぜ。ゝゆ
さてよ嶋ゝくいうでゝ彼方ふ向こゝ飛ごて。鈬さ奴うる。なごて吾ハ敢くぞこ
いてまてのへハ。長なもこゝその聰察ふ感伏しゝれバ狡こ嶋ゝゝとやをめを
めゝだ。これより海上百里でうて隔こ。女護嶋。鬼が嶋うご呼こ。いとおうゝ
ゝて嶋山めりとはゝ仗されど。其処へ渡こゝそれのもめゝふバ悦ようこゝとや
まねなり。ハ覺めゝ朝より暮れゝほで。潮曇しゝて沖のかゝもゝとゝうゝ常み
だゝ高こ浪ニ三十丈ゝ打かゝふ。彼嶋のいゝりあ潮の満干も聿ゝ


鳥朝
雀嶋ぐるりして
鬼が嶋へ
渡らんと
騒ぐ



或ハ東へ引ク亦西へ引ともあり。そ中ホ卯辰の方ゟり
より東へさす潮あり此二ツの潮のそわとと瀧川のごとく水底の巖ゟ堰出ると鳴
漬ること雷霆ゟも勝れり。これを黒潮ともまた山潮とも稱す。のおそろしき譬ふ
ゟもアるのなり此潮ゟわふ船あれバ瞬の中ホ数千里ゟ神流され活ク歸ること
なるものなり。こハ語も傳へ聞もせみゟて誰ゟ面わたり彼黒潮山潮をゑらぎ。
かくのごとし嶋あれど御曹司ハ公ざ猛究そ勇ましくおハしませバ明白ホ見ゑもる
そもゟよも徒ゟハ已ぬべし。あそこばそ多鳥ホ父とも母ともあのこともる曹司ゟ。
大魚の腹ゟ葬らんをそ定うふもいざしらず誠心ゟ欺くふべくも
な怒りのひそとおそるくヤけれ鳥朝ゟメそくゝ叫ことうらゑみ扶桑ゟ東
ホ女國あり唐山の書ホもこそそれどこのごとけがらわしき説あり。ほめて鬼ゟ位
とふ嶋あり。こはおぼつゟ夫死そして亡ざれを神と稱死そて祭ざるを鬼と
いふ鬼神ホ常の形ゟ世ゟ鬼と捕れりの八陰鬼幽冥の類なれどこのごとの人ハ
義理ゟそうちぐ剛強暴戻のれを鬼ともいふゟや敵陣ホ臨てハ鬼神と呼れ
ふれ何某と自誇し或そ鬼百合鬼味噌の名目ゟ出ゟたれこれバ彼鳥も
實の鬼の位ゟあらめて往還の艱苦ゟると嶋人の醜悪なれホよろて鬼と
いふ名ゟ負せふん憖莫ふれふ思議ホも黙の嶋ゟ経歴ゟるぐら今彼嶋を
そのこころハいと遺憾し。そ船ゟ出せ直ホ彼処へ渡るべくそと焦燥のく
ばかりゟる嶋人ホハ為朝の従者と顔うらえめしくそえて一言を
出さのゟその時嶋長ハおそり寄そ白砂ゟ額ゟ埋め御曹司僕ゟヤと
こと葉ゟやめく方三里ホ足ぬこの嶋ホ一生ゟおくる吾倹そふ憂に命を
捐んとハそこそ。ほいて御曹司ハ清和の後胤鳥義朝臣の御子なりや。
よの中れそくめれそに波風あふれ嶋守となりまくべくそこそらにうれの

まで。尊顔を拝し奉り。且その恩澤を蒙るなれば。大赦の時ゆゑ帰洛し給へ。官位俸禄の子孫あるべくもあらず。御身なれどこけれど血氣の勇とやらん健て。可惜命なきものはて。鬼が嶋ゆ赴き。あらん。石を抱き淵ゟ臨むとも名こそ。苦ゆゑめけり。爲朝熟と笑て。寔ゟ夷ごゝろゆもあらず。言葉なくしてぼろ〳〵と涙を流し。諫申ゝ。それ。従者ゟも。その等閑ならぬ。その言葉ゟ感じ。一切男の爲ゟせんとあらばこそ。女護鬼が嶋も。原日本の内なるべし。それ人怕ゝ。彼ゟ損あり。爲朝苗も身を捨てかゝる嶋人どこゆゝのなれば。我ゟ益なく。留まれ一人ありとも赴くべきぞといひすてゝ氣色めり〳〵えの人〳〵膳太沈嶋つ男二人とこの一言ゟ励されてげにゃ。僕ゟ郷導つかまつらんと誘ひ。ヤスゟ爲朝ふゝく歓びて。船ゟ粮を積入れよと下知ありて。聽て船ゟ糸の人〳〵大嶋より従ひ来る。折ゟ順風ゟ真帆あげられば船を只箭を射るごとく。漾〳〵と走りして。浪間がくれゟえ。そのれば嶋長いもちゝなり。残留れるものゟ悵然と。且く磯方ゟ立在て。ある痛しよも活くゝ帰てのごと唾さぬさる祝ゟ爲朝そ主従只五人嶋船ゟ。ふとり乗て風のまゝく走りして。帆のいとも遥けく青海原ゟ其処とも弁ぬ。艘せのゟ元ゟ爲朝ゟ筑紫の果ゟ人となりて。船路ゟよく馴のしかば自針盤を守て面よ。擬よと告ゟ。只一夜の中に。海上五六十里をのり着く。

奇〻怪〻嶋おそ歌りけれ抑この嶋八方こな荒磯あく或ハ三四十丈或ハ二十餘丈盤石並聳て。陸へわづらもめぐらぬを。爲朝主従ハ齦歯もあれる鈎索を山岩端へ投入てハ手繰ほどもなき間隔〻れ処あくハ歩板をこゝし掛。ひかくして水際へ艚著やう〳〵陸ふわがりしが。船ハ荒浪よりゆられて。巌ふ打も當れづこ开勢なれバ。船子ども色をうしなひて。こゝの水を碎かてハ何みに乗てうなるぞとやせはしかりやせまじと罵るを。爲朝微笑て船を浮てお〻びたゞしく浪ふもまれ。巌ふ砕るれいでうぞとそ雙の袖を掻揚て。舳先をうと抱つ。曳といふて纔ふ砂石轉びて船底を響かし輒く陸へ引あげまくハ。船子ども舌を振ひ。寔よ御曹司ハ天神ありてはもまもりかくれ猛おふ從ひ給ふよ〳〵や鬼が嶋ありとも。恠むべきにあらず。かくて主從ハ磯方を彼此とえうるふ足ごとくてみる頼〳〵おりひけり。

木の皮をりて編とれ。草履の尻を沖のかたへし向とくいくつともなく並置。かバ。此るゝ世ふいふ女護の嶋ありとハ。この草履を穿とそのめ〳〵おのが夫とをと。語伴とれも。虚言ふぞと散動とてなを奥深くふみ入るふ。即ざれ草木小鳥やうのの黙ありけり。そが中よ近曾渡り来ほらんとおぼしき燕の形ハ鳩よりも大きくて。腰ふ鳥よりも黒きぶ。三ッ四ッ二ッ飛ゆく彼鳥朝ごとそ。人里をなるなゝめ。誘いそげとそ。それ彼郷導ふ走りまくハ。果しなき木の間より。煙高くたちのぼりて。人家二三十軒ゑそ〳〵かゞとれバとそとて。主從走りほこそゑふ。大きなれ草舎めりて。椎のた木ふ柱とし竹を編〻壁ふ換とり。家ハ究〻低けど。床ハ甚高〻爲朝ハいの家をえめづつ。棟の低きハ浦風ふ倒されどの爲ふく。床の高きハ湿地を避た爲なるべしとて壁ふ塗




あまの
爲朝
荒磯ゟ
ぢ
舩を陸へ遣ス

ざれいいふ故ぞと尋思るふしぞ。この家れ周ゐ赤土と白き蟻集りて。足の踏つき処もあらず。柱を食せどとて。壁をだに塗ざりけり。と猜し人の生れをぼもちて。左右あらへ入ごと。且く外面ゐ立在て。裏の女房ども。髪の長さと。尋常ゐすぐれて。身丈ゐ八一二尺もあまれる。ありさびたれもあり。又馬の尾を紛ねるだて。三つ五つかり。ゐ束ね。猶ゐて結びさげたるもあり。衣服ゐ裾短なれ給を。五六尺ゐ嶌絹を帯とし。機を織つうたふを。笑ひ。嘲つ女おへ。中人のけはひとれとも。うりて。

そぬの中でもそろもそろにほせなそろもそろ

ヲサひさめよく。ヲサひさめよく。

ひと訛れる声音ゐて。唱歌を機のもとにて。主従忍ゐ堪ど。呵ことに笑ひ。嘲つ女おへ。中人のけはひとれとも。うりて。熟とえめくりしゐ忽地大ゐ驚き怕ど。梭を捨。機を踏ゐ。こな背門口より逃失ぬ。されども一人の女子。年紀十八九なれらんとおぼしきのこ。機を織ることそろめの如く。絶ず怕ず氣色ゐ見れば。爲朝裏ゐ入りて。件の女子ゐ對ひ。うち入れ。えず避ぬるのうべし。されど汝只一人残ず留ることいと疎ど。そもとそを女護の嶋ありや。又この嶋ゐ長ありやと問ゐ。彼女子。自若として機をとめ浮世ゐ遠き嶋なれば。その名を何と呼ることふりのあらざれば。女護とも呼ばなれば。元来嶋ゐ長なれへ君と仕れよとぞもはし。花咲ず。えず春とも。霜も置ず。暖なれば常なれば。寒ことふことあらぬ浪のよれべなれば。紅葉なれを秋とも。雪も降ぞ多ゐ積れば。夏とて單風烈なれば。雨の日ゐ笠も載ふれ蓑も

那一。蓬ひみ嶋絹の被を晴み頬かぶり。寝るみも起るみも。衾も被ど爐もり。よもね夜九寝の夢みぶく。締ぐぬ髪の長ど日ぬ暮くかみそれ鄙曲と。笑てや笑ひのひろん。そぶぶさよこ同苔ろ。爲朝ゆくく怪こそれ彼処おく竊ゆせくみ。他一女子のめいひざゐへ解かくてるのこおろく汝が荅ふとこ後ん。日本人の言まふ違ひど。汝へこれ人う神う。そこ此嶋の人のふぬ。いと不審と宣へぞ。彼女子かこのまま怪このふも理なり。御矛そ。大嶋とかくんへ流されのひー。鎮西八郎爲朝君ふく在そなれど」近曾誰しふもおく。十年以来如此くくの壮士。伊豆國大嶋といふ処おさすくひ。嶋人を憐み剰近き嶋人もその蔭ぬ蒙りて耕漢所爲ふ便宜ぬ好そう。志れども。彼人こそ後ざ後勇て露ざかりも従ざれのあれど。忽地射殺しのふとしう。これが目今ひくみもぬの仲でもそちあうとぬかりぬ。又はせるとんぬそちもあうう此嶋の方言みそく。八郎とヤそるみん。そちあうしかこうぬ。とんそちもあうとん八郎のうみも矢みもあるふぶ」剛さ八郎なりとヤスとぬ秘そべーとうかふおほじ。さそこうふつなもの。この嶋ふまれこバ日本人の言葉へ笑ちりわぶぶしお昨夜あやーて夢の告ありそ。豎の朝八郎爲朝此嶋へ渡り来く。汝ホその庇を蒙れこそめれべー。これぐ言語通ぜざこ便みくん彼へかこうぞ。それへかこうぞそこて。和語ぬ教まふこと。いと叮嚀なりしうばこふ夢こそ後ぬ告ありそ。豎の朝八郎爲朝此嶋へ渡會郡山田お父ーく住むのなり。今こうこれを。者婆明神と祝紀ぞこの嶋久後繁昌さべーと告のふこそ後も教られこれるみへ忘れぞ。ちるかくふふそ爲朝君し

と猜く〳〵残て留て今問ふもをかしくれば爲朝もそく〳〵奇なりとし推量みたぐひぞ。それハ八郎爲朝なり。又洲が夢ごとゝいふハ疑ふべうもあらぬ。天照太神あてゝおつるをめり。その路いまだ開け初ざるにも日本の内なれバこそ。かゝれ示現ハあるおもめ頼むくゝて遥ゝ伊勢のくにゝ拜みまつれハ外面おのづから従者ホも滅ぬ。感涙袂をぬらしつゝ

## 第十七回

勇婦刀を振ふ山猫忽死を

猛將計を定ふ夫婦全襲れ

その時爲朝ハ。ゆくりなく彼女子ホ對ひ。汝この嶋に男子ありといふをも太極両儀より生じ。両儀陰陽夫婦を生ぜり。これ自然の理なりいづれの國とてそう。父なきの子あらんや。いづれの嶋とてそう。夫なきの婦あらんや。いひもて行ば女護の嶋人ハ。南風ホ吹れて孕むとぞいふ。汝ハ



もれ人の。いつで實言とハ笑づや。又彼首の磯方ホ。數の草履あるしぞ。これも漂泊人件の草履を穿ことめれバそのめ一おのづ夫とすと。童どもが雨夜の物がたりあいとおもれど。實ホおもふにやおうぶびやか。これそうぶ海月の骨ありのごとく稀おべ。そもこの嶋ハいづの何とぬるをそと問ふに女子答て。又洲が名をと呼ぶ仕ぐり。この嶋いづの頃より開けたれと。定ふハ物ホ記ゝても仕ぶ術ど。口の碑ホ仕ぐゝれいむし異朝秦始皇帝。長生不老の仙茅を求めるふこと。いと親切なりしぶ。宋無忌といふの秦ゝゝく。扶桑の東ホこゝの仙山むり。この山ホ仙人數住ゝ。不老不死の薬と煉といふり。方士徐福と呼ゝりの件ホ彼仙山へ到ゝしるめりとヤスより仕。始皇ホ徐福ホ彼の童女の童五百人ゆゝ金銀珠玉





そんのそうず
秦徐福
が故ふる

五穀蚕桑麻等始教之。東海蓬萊之山(遺一)。仙丹を求めしむ。徐福う
な船を。日本熊野という浦に着ぬ。時に日本孝靈天皇の御宇。徐福が幸して
彼処までの事なれども。終に不死の草なれば。ぬう〳〵後難を怕て唐山
へ帰ず。その男は止まりて熊野に留て。従男女の童を。この嶋に捨おけり。又男
の童おハ。とう〳〵二十里でかりなる船を。嶋山に捨られしが。徐福熊野
男女ともに便なくしてひ。齎し来たれる五穀を栽て耕
耘の業を教へ。又野蚕の養ひ絹を織ことを。かく〳〵して命を繋ぐ。なほ食ふものなく
して。或時は鹹草の根を掘て糧とし。あれ肥たる土地を見ては。
という果を拾ひて糧とし。海潮をその儘汲こと酢の蜜柑九年母楊梅。
などの液に紋り。又獲る処の魚の餘れるを。ぬるく肉醤として塩配と名づけ。
これを物に烹て食ふに。最上の美味とをもへり。今とてもなほ然り。されば
往古より故國の好を忘れざること。世〳〵男の嶋人ぞと。妹背の契ハ締ども
男女ともに住ハ海神の祟ありとしりて。極めて夫婦一ツ床に
れとこれせざる。一年おに一度南風の吹日あれバ海神の祟許ありて。極く稀に
男の嶋人ぞと。渡り。そうなれば假寝の夢を結ぶ。男子生れば彼
嶋へ送り遣す。女子生れば。此嶋おも送ることなし。女子生れて
も南風も吹れて孕むこと世おハじめ。又草履ゑるべおもえざれども
ごとく筋のへめぐりで。夫の急ぎて。今茲も風が便りて渡り来
よかしと。待ち給うその人は草履ゑ磯方おも出ありく。これ日本人の旅
の留守お陰膳とて。居るにむとしく。みな我嶋の習俗なり。事詳おその
がれハ。従者ハいもさ〳〵なり。鳥朝膝ゑ磯と拍て。ひお巷談街説も一
既おも誣るごとく。今この女子が説ところと世おも語り伝くるとて。當ぶれる

遠かゝぶ。人ハさなぐれ世な孫るゝのゑ都會繁花の地ふそれさゑ人ハ耕さゞしく食ひ織ゞして被却田舎人の辛苦な必ゝぞ。かゝれ果報のあり合がゝぶる月騎ふ眺ゞて足ざをらゝみ。もうわく貪りて飽ことなもゝねバ終ゆ冥加ふ盡くて。子孫ハなりゆくゝの多一のゑれ伊豆のうらゝ攻鼈を教化して男女を一ツふ住し。伊豆七嶋のうちゑ加くハ後の世ふ益あゞべとおぼ珠さゝふに言葉を和げ。ぬゝく憐さゑひ鄙ふ逃躲れさゑれ嶋つ女いゝもやゝうりまく。物の蔭ふ竊ゞし言語通ぜゞバ定うもハゞもゝ綿ど半を猶くて大ふ故ゞるゝも耳よ。てこゞさもゑよさ呼つゞくゝ処せさはて團ゞ一つ。嶋言語なゝくゝやこれい。神のいわせあし。ゑや。八郎の事ま人るゑハ豫ゝくもりてハ行りしち只強弓の勇士ゝのこゝひさゝや人ふ憐こゝのあゝとのかゝくも親切なゝんとゝ。陀

花も今と盛りし。茄子と。塩配りゝく。烹ゝ進くせんとて。二三人走り去り。索階子ゑかゝく。茄子の樹ふ攀登り。大なゆうえ筒るゞ五侯鯖み。鹹草の粮食よそゝ。烏朝主役を饗ゝろう。彼めさ草とらのハ莖かゞゞくに分ゞくゝ。土際ようり生ひ根葉ともふ人参ふ似くゝ味ひ甘くゝ若みありゝ。みゝの門ふ種を蒔ふ。春ふ至り。彼岸のころよゆうやく芽を吐。その年ふ莖七八寸ふ及び寒中ふも葉の凋拮くゝことゑ。二年ふしてその根を堀とり。ゑふハ常ふ摘取ゝ根をふゝもに粮とし。又燕薙蔔ハ土際ようり切ふるふ切ゝ口ようりゑふ生ひ出ゞくゝ度も茎立ゝて。春ふ至ゝても盡ゞそゝいゝ。その舟烏朝へ二郎長女ふ對ひ。春の季ふ。茄子めあるゝ人珍しそと宣ゝバ長女ゝゆうこの嶋ハみゝの暖ゝのれバ草をふも枯ゝ木の葉も落ゝるゝん。茄子るゝも。四季ふ花ゝて子を締び。二年ふ二年を経ゝる樹あり。ゑなん二年茹子



女護の嶋人ホ
厚く烏朝を
歎待そ

あく伝る。その兄を陀く花と呼びけれ。按ずるに陀く花を唐名ぬう。杜鵑とのことを證新書ヨ陀く花ハ三年茄子の花ともとまるし烏朝ハその子ともこと。悉く孫くそのはことこと。悲しくひ見」べ。ぬるくびこ三郎長女ふ對ひ。汝が名ハいづかと稱ふるぞや。男の嶋の東七郎三郎の長女と呼ぶへいうなれ故ぞと問ふ。長女うち笑く。男の嶋と徐福お捨られこれ男の童おが子孫の住む嶋あて行り。彼嶋あてハ一里ばかりたらう。二男をもらう。三男やさぶり。四男ハもらうと。五男とごらう。六男ぬうくらう。七男をもちう。八男とそのらう。九男とごらうと。別ふ名ぼくれと。又此嶋あてへ。長女とおよこ二女とうう。三女とて。四女ハぐと五女とちいう。六女ぬくぐと。七女八女九女とべ。大ぐとく大ぐとくひ」とぼびく。これも別ふ名ばくるのぬ。かくてハその名の紛くゆゑふ。これふ処と親の名。祖父の名をも定ひ。ごらうがごとく父ハ男の嶋の東れ郷ふ住行る。七郎とのひーりの三男三郎が長女おて行れ。男の嶋の東七郎処の名。祖父三郎父の名の長女と呼ぶ行り。この好あも愛女をあつと稱盗人をめと乏と罵り。尻をもぐこと脚をつくこと涙をめるこ苧桶をもくん。鍬ぬこともが。平鍬をひうてが。衣服をみうく。をてらこうぬり。みうこの嶋の方言うり。餘ハ准くもりるくひとれれハ烏朝点頭くその後ハ嶋言語をりて。衆人を教諭るくへ衆悉くメまてこうぬりこうのもうりけてかくて烏朝ハ次の日嶋う女ふ郷導ぼして。彼此をお殖ちうのふふとの日海上よく晴く。伊豆の山く。駿河の富士伊勢。志摩の高山峯。又坤乃方ふ。嶋山ゆうのりのくひゆるぞ。薩摩洋なれぐことおぼをふいづれも夫かとそふぐりまて。定うふハ晴もとぐかと。住古徐福が熊野ようこの嶋へ女れ童ら不を配當ちくれとこのふ就く考るへ孝昊天皇ハ大和の黒田盧戸宮ふ座これハ熊野ようて行く。東海蓬莱の仙山くも稱ん。又富士熟田熊野ハ

のく三所の蓬莱もひけくれバそのこゝ面おうつおハめくれ。杪一丈おあまり。木理いと美しくて。鐵刀樹めくるおうて。その名を問ふくべきをと樹こと答ふ。又高さ五六丈ばかりにて。葉ハ垣衣艸に似て。廣さ芭蕉葉のごく。八方へ垂こゝれありその名を問ふくへきをと樹ありといふ。この外棗の木殿めりて。寄生そげふ仙境といふもうべなり。珠こゝ織績るの工ふれがる嶋ふ似げるく。蚕飼して糸をとるふ車を用ひて指おくより。或ハ機を用ひてく杜るふ。綾ハおのうはふく織出せり。後世五反懸八反懸と稱れへこの法を用るなれべし。深色ハ黄と桃と黒と此三色多く黄へ七月より九月の間ふかりやすと染る事三四十遍おして。椿の灰をりく色を出す。梔ハ秋冬の肉もこと稱る木の皮を煎じて染れる又三十遍でかりはして灸を出とるの前のごとし。又黒の染ハて時ふ。椎の皮を煎じて浸るの二十四五遍おくび。田の泥をりて色を出とるの皆是往昔呉織漢織の遺法ふくく。徐福とゝもふ渡りきふ。女の童ふ傚うり。されどもこの間生ぐハ貢ぐて國もうく。繁べくやうもあくく。おのれくぶ夫と定一男の嶋人ふ織こ被せ又親お被せ子お被そるのみなれバ利の鳥お所鳥のほよそるの。他國お勝れりとぞ。鳥朝ふこれのるの男の嶋人ふ一つお仕せるバ。耕作漁猟の所鳥もいよく閑なんとおゝして。折くこれくのこをを説示一るふおふ。三郎の長女のこゞびおとそふ氣色おれバこその餘の嶋つ女おハ海神の崇めりこて兼ことそふ鳥朝思慮ふめぐらし老こ口のく利婦を招そこく長女ぐる父ふ問のふおふ老女答くく。彼長女が母ハいめれ年ふほり父ハ男の嶋ふ居れど。その身おいまこ夫ふこその性怜悧こて男だまりひりこの嶋の習俗ふこく。月の障あるのハ又子を産るのハ山蔭ふ穂屋と造りて他屋と縄只

一人彼他屋へ赴くこと久聽さゞるに。日子果ぬれバ。母屋へ歸りて飲食
終れのち自在るゝまゝに。風濕を犯されるなどして。病りのもいと多く。長女ハ孫さへ
ありとも公らく思ひ設ぐ。嗚呼の習俗なれバとて。去年の冬。從女
ふたり。婦子を產さく。西山の他屋まゐり。長女熟そのゆう他人ハ力及ぬと從女
の只ひとりこゝをる寂しさ堪ざれバ。夜伽せばやと思ひくつろぎ
その日かの他屋へ行くこれハ児ハめしつれて從女ハ夜引被潛然と泣居
たれバ長女しばかりこゝて故を問ふ。從女涙をかこち拂ひさまれバ昨夜つゞ母の
あのびやうふ訪せまひくて。身二ツよかりてハ。飲食のゆもいよ〳〵便ありて
そゝ憚と。夜るく〳〵ゆりて看病をもつくも人のそゝるこゝもあれぬ」と思ひく。詰る
つゝ貴ふ公うれしくその夜ハ快く睡ぬ。母ハいつの程ぞ
ゆりまひくて児もめづらなりぬ。是彼やゝ曾ることもあれがいと怪〳〵も公



ゝとるさふ。行くく問まけれど。日子果ぐれバ。母屋へ歸ることも
さまざまひうちーわ語るに。長女ハもとく不審く。彼此とうるふ。出居の敷板
ふ一滴の鮮血こぼれてあり。しかぶ。あな痛ー児ハ妖怪ふ銜去られんと措しめぐ。
それとハ形ーに從女をいひ慰めて走りかへりてのよく准備ー。人ふも告ざ
よりやおそ〳〵とそふするのありとも。公なれ錢めて。長女がせんやうなくといへバ從
その瞳昏又彼他屋ふゆきく。從女ハいよ〳〵おぼつかなくて涙ふ善悪もにぐりまり。
女ハいよ〳〵おぼつかなくて涙ふ善悪もにぐりまり。
ぬもさうそへなく氣色われどいよく驚き憂まうんとそひく。明白ふまひし
ばぐ。こゝ究くやうめれるまことそ。つがひ。
よりやおそ〳〵とそふするのありとも。公なれ錢めて。長女がせんやうなくといへバ從
女ハいよ〳〵おぼつかなくて涙ふ善悪もにぐりまり。ぬれ從女ハ。更ゆ〳〵
ほ〳〵ふそひく疲まて。とう〳〵と目睡ー。かゞ。長女ハ笹屏風の蔭ふありて。外面ふ
睛とゑつ。妖怪今宵も生よかーとほつほどふ。忽地門の戸ほとく〳〵と音しぬ。


従弟女の
おとこ
他屋ね長女
ようかい
妖怪ども
刺



と戸口その儘ゐ〻開うねどゝいづちよりか入りたりん。怪き老女の枕方ちう〳〵山のみ
ゐる死。吐嗟とゝ熟視るに飛ハつゞ叔母ゐ似〻れど。眼の光人を射〻口ハ耳の根
ほで裂〻それが血と盛れ盆ゐ異ゐ〳〵なり。左右の肩へ〻乱せ〻白髪ハ枯野の尾花
ゐ似〻。孤燈の下ゐ立〻りけれ。長女ハよく〳〵こゝを悔〻て豫〻くゐてゐ〻りし
苧桶の内ゐ嵐こゝ四ゝ入ゐてこれ。さこゝ走り出さんれバ妖怪ゝを倩とえも果ぜ。
彼嵐ゐ追んとされ。由断をうこゞこゝ物蔭より。解刀ゐ閃〻つゝと走りかゝ
つ。妖怪ゐぐさこゝ刺さ〻れて〻一声阿と叫び。形ハ消〻くるうけり。従芽女もこの
胖響ゐ驚ゐそれハ。長女ハ血刀ゐ拭ひて。ゐりしるべ物がゝり。既ゐ児の仇
ゐ撃ぬ。彼今深ゐまで負〻れバ。迷とゐも如〻何ぞ捕やとし。天もあけバ衆人ゝかり
催し。蹤血ゐ認〻て索ねゝんといふ。従芽女ハ縁由ゝ聞〻て大ゐ驚〻且長女
が忠ざゐの勇ゐ嘆賞〻て已ど。かくて東方ゐくと明ゐれが長女ハ彼

此人を呼つゞ〳〵一五一十ゐ告ゝ〻し。蹤血を探ゐ妖怪の往方を索ねゝ。跡ゐ躡
磯山ゐ大なる洞穴あり。入〻て。血ハゐがく〳〵洞の中ゐ入りしバそれぞと衆人
力ゐ勢〻。や洞を掘崩さんとすれバ。彼苦痛ゐ堪ざりけん。大ゐ哮り〻よゝ踊
めて出ゝをこれバ頭より尾ゐ至〻六七尺もあれらんとおぼ〻ゐ山猫ゐ〻ぞ
ありける。この猫長女ゐ瞎を刺ゐこゝぶの目死もやゝでありけれそ衆人終
ゐ打殺〻て。海へ沈めけりとぞ。この嶋ハ山牛野馬猫鼠の対ゐ絶〻ゐ獣ゐし
そゞ中ゐ一種山猫と呼做ゝすのあり。大さ五尺ゐ餘りて足ハ短く尾ハ長し
この猫ぬかく山中ゐ躲れく常ゐハ人の睛ゐかゝらゞ。折ゐし岩端ゐぶ
彼ゞ食残〻たれ。鳥の毛あれをえのみ。それも飢るゝそれハ里ゐ出て食を
竊み動もされバ小児を含去りて食ふこともあれどかゝれるゐハいと稀あり。
されバ長女ゞ勇て。この時ゐ著く。衆人是より長女を蔑らゞ。今度君の

渡らせ給ふにても彼いふ和語をよくうけ給れば人まろく奇しき處女なりと稱仰ぎ。と物がたりおはすぞ爲朝も只顧みその智勇をこゝろよしとしあれ日長女を宣ふ男の嶋人をうちそゝみ住しまろ又この女子なにうそ彼嶋より遣し。互ふ耕作漁猟の便よくせんとも思ふ嶋つ女ホ頑ふなのこゝろ従ぞ。夫婦八人の大倫はして海神のれうゐ人の心ぞよめでゝ汝へいまぞ夫はしと笑りうれ色を好むふめるぞ。世のつねの人の爲なれで且くこゝにあり汝妾ホ。その崇なるをもゝへめがく推辞こゝろもなくなりて夫婦一ッふ娶ぎ汝がこゝろまぞやと宣へば長女故びて。世の爲人の爲なれおがく賤きつぐ男と假初あもほさう近う召もりまんとふよな幸福よなりさうれど御書ぬ汚しなまんへいかゝもかとと回答ヤどうふ爲朝おぞて長女を妾と二手あまりこの嶋ふ生しゝ。その手の暮ふ長女男児を産り。も雙生なりしゝ。太郎九二郎九と名づけ母のまして養育しまふ嶋つ女ホこの形勢ぬ美くゝ。ちゞめて暁得。いまゝ男女むつまふ住む村ゝ海神の崇ありと。いひりて仕へまつれば虚言ふくありけれど可惜年月ぬ徒ふ過して。夫妻ゝのこゝろひとつに愚さよと咲ふれば。爲朝今ぞ知ぬ。ゆくびこて舟出して。四人の従者と促しまろ男の嶋へ渡りまろとぞ。

# 論語十卷